浜村新潟の都市空間に関する復元的研究

古新潟之図の歴史地理学的考察

A STUDY ON SPATIAL RECONSTRUCTION OF THE RIVERBANK TOWN OF NIIGATA

Historical geography analysis of the plan of early Niigata

水田 恒樹*

Tsuneki MIZUTA

This paper is to reconstruct the urban space of early Niigata which lay on the left bank of the Shinano River in the first half of the seventeenth century. For this purpose, the methodology of historical geography is applied to compare three maps. The first is the illustrated plan of early Niigata drawn at an unknown time, the second is the eighteenth century map of Yorii village which relocated to where early Niigata used to be and the third is the current map of the same area. The results of this study are as follows:

1. Two existing pathways are identified as those of early Niigata.
2. The modern canals of this area are identified as the left stream of the Shinano River in the period of early Niigata.
3. The dune formed before the fourteenth century is identified as the hill on which the oldest part of early Niigata used to be.

Keywords : Riverbank town of Niigata, Island town of Niigata, Seventeenth century, Spatial reconstruction, Historical geography

浜村新潟, 島村新潟, 17 世紀, 空間の復元, 歴史地理学

1. 研究の背景

近世の湊町新潟は信濃川河口左岸にあって、少なくとも二度の移転を経た。最後の移転は砂嘴の浜村から中洲の島村へと行われたが、その時期に関しては漸次比重が移ったとする 17 世紀初頭説と、幕府許可のもと計画移転したとする 17 世紀中葉説がある。長岡藩主堀直奇による元和 3 (1612) 年の都市整備の舞台が、初頭説では移転後の島村新潟、中葉説では移転前の浜村新潟となり、浜村新潟の都市像が大きく分かれる。

17 世紀初頭説を展開したのは昭和 9 年刊行の新潟市史(以下、旧市史)が嚆矢だった。旧市史以前に広く信じられてきた 17 世紀中葉説を、新史料に基づいて再評価したのは平成 7 年刊行の新潟市史(以下、新市史)である。近年、新市史への反論、それに対する再反論が郷土史誌などを賑わせたが、明確な決着には至っていない。

新旧両市史に掲載された制作年代不詳の「古新潟之図」によれば、浜村新潟は整然とした格子状の都市であり、堀こそないが街路名や町名、その配列などが酷似することから、島村新潟の原型と考えられる。しかし、浜村新潟は寒村に過ぎず、都市的な発展は島村以降とする旧市史は、同図を「偽古図」と断じた¹⁾。他方、新市史は直接に真偽を論じていないが²⁾、平成 2 年発行の市史編集室広報誌には肯定的な見解が掲載された³⁾。

2. 研究の目的と方法

文献の評価や解釈を巡る議論が行き詰まる中、仮に後世の制作であっても、「古新潟之図」が持つかもしれない重要な情報を探る意義は大きい。既往研究は主として同図の文字情報を対象としてきたが、描かれた空間を自然史や都市史の文脈において分析すれば、新たな事実が明らかになる可能性もある。

こうした認識に立ち、「古新潟之図」に描かれた浜村新潟が実際の姿を反映するものと仮定し、その都市空間を現在の地図上に復元することを本研究の目的とする。そのために主として歴史地理学的方法を援用し、当時の河川や砂洲、砂丘などの自然地形、後世の絵図に残る人為の痕跡と同図の整合性を検証する。結果として大きな破綻があれば同図の真性が疑われ、なければ支持されたと言える。

なお、本研究では浜村新潟の存在が推定されるあたりを「寄居地区」と呼ぶ。新潟町が寄居村のあった中洲へ移転した後、その跡地には新たな寄居村がつくられ、両者が積層しているからである。

3. 既往研究における「古新潟之図」の評価

まず、旧市史が「古新潟之図」を偽古図とした 4 つの根拠と、新市史編集近世史部会による反論を要約する。第一に町民の信仰を集めた白山宮社が、浜村新潟ではなく無人の白山島にあるのは不自然

* 法政大学デザイン工学部建築学科 大学院生・医博・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, School of Design & Engineering, Hosei University, Ph. D. in Med., M. Eng.

はないか。第二段階は代官所の設置に際して古町の南端に寺や侍屋敷、倉庫群ができた。第三段階は上記の元和三年で、堆積の進んだ西川の旧河道に本町がつくられた。これに伴い古町前面の小路は延長され、第一段階からの名称を引き継いだ。侍屋敷前面の新たな小路はその付属施設に因んで命名した。洲崎町は鮭漁などを営む漁師を集め、漁業集落として整備したものであろう。第四段階は町人による川原町の開発で、西川への堆積がさらに進んだことを示す。

16 世紀末の新潟町には 12 寺院が開基、移転していた¹⁴⁾。前述の宮本モデルで考えるなら、第一段階では各寺院と河岸を結ぶ小路沿いに複数のタテ型町空間が並列していたが、第三段階では通りが卓越するヨコ型に改造し、商都としての一体性を強化した。その背景には個々の寺院による管理交易を封じ、第二段階で設置した代官所による一元的な支配のもとに、市場交易の振興をめざす長岡藩の意図があったと考えられる。

5. 「享保田畑図」に描かれた寄居村

「享保五(1720)年五月寄居村田畑地面図」(以下「享保田畑図」)は、寄居村の全耕地について本途墾田と新田、田畑の別、上中下の等級、面積と分米高、飛砂被害や荒地化の状況を記述したものである。もとより徴税の基礎資料として正確を期した筈だが、寺町 23 寺院の間口寸法を明治中期¹⁵⁾ および現在の土地区画図と比較した結果、地

図2 享保田畑図 (旧市史上巻、I 第七図より作成 注3))

図としての精度も高いと考える。新潟町と寄居村の土地交換から 65 年後の絵図で、浜村新潟の痕跡を残す可能性があるが、管見の限りこの史料から当時の地形や浜村新潟の遺構を論じた研究はない。なお、図2では耕地面積と分米高、備考の表記を省略している。

東西方向の道路は4本が描かれている。後世の新潟町と寄居村を描いた絵図によれば、最北の道は広小路道、中央の道は寄居道と呼ばれた¹⁶⁾。中央部を南西から北東に流れるのは農業用水路と思われる。元禄 12(1699)年の絵図には寺院列西側を北流する西川の痕跡が描かれているが¹⁷⁾、この図では寄居道南側の耕地(カ)にその一部が残る。以北の自然流路には手を加え、西を迂回させたのではない。この用水路には砂丘麓の2ヵ所に発する派川が合流し、さらに水量を補うためか、寄居道両側の水路を通じて西堀から導水している。流末は広小路道沿いの水路で、再び西堀に戻る。

寄居村の耕地は大きく3つに分けられる。第一は東側、寺町の寺院敷地内の耕地である。伽藍や庫裡は島村新潟に属するが、田畑などの付属地は寄居村の持ち分だった¹⁸⁾。なお、近年郊外移転した長善寺以外の 22 寺院は、約 300 年を経た現在も当時と同じ位置にある。第二は上記農業用水路沿いの低地で、本途すなわち移転直後の水田が集中し、上田や中田を含む。後世に開発された新田も多く、寄居村の中心的な耕作地である。第三は西側砂丘上の本途1、新田3、放棄された田1で、砂入り、砂畑の記述から飛砂被害が知られる。なお、それに接して寄居村十軒の集落がある。

ここで村内の標高を考える。もともと西川の河道だった寺町と用水路沿いの耕地(イ)~(ク)は低地にある。唯一の例外は中央部北端の砂畑(ア)で、後述するように微高地にあって田にできなかった。逆に、西側砂丘麓の4つの田(サ)~(セ)は水の引ける高さだったが、拡大する砂丘に埋まり始めている。寄居村集落(コ)と南接する耕地(ソ)には砂畑と表記されており、微高地上にあったのだろう。

6. 「現状図」における寄居地区

図3は寄居地区の現状を示し、古道、昭和 30 年代に埋められた堀、等高線、社寺や旧跡を強調している。明治期初頭、寄居地区の宅地開発に際し、旧西川跡に寺裏堀(a)、西中堀(b)、東大畑堀(c)が整備された¹⁹⁾。その沿線の河岸低地は、今も概ね標高 0 m である。西側には標高差 10 m を越える崖線が南北に走り、砂丘台地と河岸低地を分けている。北部には標高 3 ~ 7 m 程度の微高地が張り出し、大仙寺①、新潟市美術館②、西大畑公園③、行形亭(いきなりや)庭園④、新潟大神宮と稲荷神社⑤などの緑地帯をなす。近世から航行の監視に利用された日和山⑬は、その北端に位置する。砂丘台地と微高地の谷間には、標高 2 m 前後の田中町(X)がある。

7. 新潟平野における長期の地形変化

新潟平野の砂丘群は内陸側から4列の新砂丘Ⅰ、同じく4列の新砂丘Ⅱ、2列の新砂丘Ⅲからなり、海に近いほど新しく大規模である(図4)。新砂丘Ⅲ-1からは須恵器や宋銭が出土し、Ⅲ-2に遺物は見つからない。加えて、両者間低地の泥炭年齢が 630 ± 90 年であることから、Ⅲ-2は室町期以降に形成された²⁰⁾。

信濃川以西ではⅢ-1とⅢ-2が重なって1列になっているとされるが、より正確には寄居地区の上記微高地はⅢ-1、崖線より西の砂丘台地がⅢ-2であり、両者が重なるのは Doppuri 坂⑦以西と考えたい。

図3 現状図 (新潟市地理情報システムより作成)

図4 新潟砂丘の分布 (新潟市史資料編12、図1-9を加工)

その場合、微高地は室町期までにできあがっていたことになる。

長期的な標高の変化に言及すれば、新潟平野では地殻変動による沈降と、河川活動や飛砂による堆積が同時に進んでいる²¹⁾。過去400年間、寄居地区の砂丘台地では飛砂の堆積が圧倒的に優位だったが、微高地やその後背地は1.5m程度沈下、河岸低地は沈下と堆積が拮抗したものと推定される。^{注4)}

8. 「古新潟之図」と「享保田畑図」の対応関係

「享保田畑図」において、中央低地南部の耕地は整形に区画されている。このうち本途上田・中田(ク)は、新潟町が島村へ移転した後の天和2(1682)年、白山堀北岸に横町蔵が建設された際に²²⁾、蔵裏にも堀を開削したことから、この形態になったと考えられる。これに対して、純然たる農地の(オ)(カ)(キ)を整形に開発する必然性はなく、何らかの歴史的な経緯が推察される。特に(オ)の外周三方の水路は、浜村新潟の遺構ではないか。

「古新潟之図」に内陸の水路は描かれていないが、西川から遠い内陸の御上蔵と御下蔵へ米を搬送するため、南北の両ワクラ(御蔵)小路に沿って舟運があったと仮定すれば、上記耕地(オ)の南辺が御上蔵堀、北辺が御下蔵堀、東辺が西川河岸だったと説明できる。

「古新潟之図」から「享保田畑図」までの65年間に西川の姿は大きく変化した。前者に描かれた西川の両岸は後者のどこに比定できるだろうか。まず、上記の仮説から左岸は耕地(オ)の東辺にあたる。他方、当時の右岸は旧寄居村の集落と農地がある中洲に過ぎず、「古新潟之図」が描くほどに明確な水際線があったとは考えにくい。

強いて比定するなら「古新潟之図」の西川右岸は西堀だろう。陸水の境に浅瀬や萱原が広がっていたが、そこに排水路として島村新潟以降に整備されたのが西堀(寺町堀)、掘削土を盛って造成したのが寺町ではないか。この結果、信濃川から流入する水は白山堀から西堀に導かれ、西川は自然河川の機能を失う。以後、寄居村の排水路、農業用水路として残った姿が「享保田畑図」に描かれている。

9. 「享保田畑図」と「現状図」の対応関係

「享保田畑図」における広小路は真宗寺¹⁵と勝楽寺¹⁶の間を通ることから現在の広小路(P)、寄居道は浄光寺¹⁷と善導寺¹⁸の間を通ることから現在の営所通り(Q)である。西堀沿い23寺院敷地と村との境界も、中央部5寺院の突出部は別として「現状図」上で概ね判別できるが、近世を通じて大きく成長した砂丘台地のため、寄居村の西半は比定しがたい。

手がかりの第一は「現状図」南部の崖線下の諏訪神社⁶である。同社は寄居村の鎮守だったが、「享保田畑図」耕地(オ)の寄居道沿いに描かれた、小さな正方形の土地と建物がこれではないか。^{注5)} 当時は田の中、現在は砂丘台地の麓にあることから、砂丘の成長と移動がわかる。なお、近くの招魂坂⁸はその崖を登る階段である。

第二の手がかりは「現状図」中央部の崖線下、異人池跡¹⁰に発する南畑堀(d)である。「享保田畑図」の用水路に耕地(ウ)で合流する派川がその前身ならば、やはり砂丘の東進がわかる。異人池跡¹⁰から砂丘台地へ登る階段が、現在の Doppeli 坂⁷である。

「享保田畑図」北端の「新田・砂畑」(ア)は往生院¹⁴から真宗寺¹⁵までの敷地に接していることから、現在は大仙寺¹と新潟市美術館²のある微高地だろう。また、「近年砂入ニ罷成候」との但し書

きから背後砂丘麓の田中町(Ⅹ)も含むだろうが、現在までの地盤沈降を考慮すれば当時の標高は3.5m近くあり、微高地の一部だった。

その南に接する耕地(Ⅰ)のうち「荒地」部分は現在の西大畑公園③、行形亭④、稲荷神社⑤などが連なる微高地、「下田」部分はそれらの東麓の低地(Ⅱ)だろう。さらに南に広がる「本途中田」(Ⅲ)と「本途中下田」(Ⅳ)は、「現状図」の新潟小学校⑪や寄居中学校⑫のある河岸低地にあたるが、用水路より西は砂丘台地の地下である。

「享保田畑図」の西側砂丘上の耕地(Ⅴ)～(Ⅶ)と集落(Ⅷ)も砂丘台地に埋もれ、現在は主として新潟大学医学部⑨の敷地となっている。なお、飛砂を避けて18世紀後半に集落が移ってきたのが、現在の住居表示で寄居町(Ⅷ)とされているあたりである²³⁾。

10. 「古新潟之図」に描かれた浜村新潟の位置比定

前述のように「古新潟之図」のヲクラ小路(北)は、「享保田畑図」における整形耕地(Ⅰ)の北辺水路と考えた。北辺水路は寄居道に沿い、浄光寺⑪と善導寺⑫の間を通るから、「現状図」の営所通(Ⅷ)である(図5)。また、「古新潟之図」の川原町東の水際線は、「享保田畑図」における整形区画(Ⅰ)の東辺水路と考えた。それに並行して耕地(Ⅱ)を流れる旧西川の細流は、真浄寺⑬から善導寺⑫の西側を北上することから「現状図」の寺裏堀(Ⅸ)である。

従って、浜村新潟の川原町南部、上一から下二の本町などは、概ね現在の営所通(Ⅷ)以南、寺裏堀(Ⅸ)以西の河岸低地にあったことになる。それより西では近世を通じて砂丘の東進が顕著であり、御代屋敷敷や藩蔵の敷地は大半が新潟大学医学部⑨のある砂丘台地に埋もれた可能性が高い。

次に、「古新潟之図」の広小路以北では十七軒、十四軒、横町、能登町と北上するほど砂丘が西川に迫り、小路が短くなる。「享保田畑図」でも広小路道以北の砂畑(Ⅲ)は、往生院⑭裏を頂点とする三角形をなす。さらに、「現状図」でも微高地と寺裏が接近するのは広小路(Ⅷ)以北である。すなわち、3つ時代を通して三角形の底辺は広小路であり、その位置と名称は変わっていないと考えられる。

従って、浜村新潟中央部の二ノ町から六ノ町は、現在の営所通(Ⅷ)以北、広小路(Ⅷ)以南、西中堀(Ⅹ)と東大畑堀(Ⅺ)以西に拡がっていた。起源を中世に遡る古町は水害のない微高地とその後背、元和期に開発された本町は河岸低地にあったのだろう。

このように、「古新潟之図」に描かれた浜村新潟の位置比定の鍵となる座標は、南北方向には現在の広小路(Ⅷ)と営所通(Ⅷ)、東西方向には微高地と西川跡の寺裏堀(Ⅸ)、西中堀(Ⅹ)、東大畑堀(Ⅺ)である。

須崎イッテツ町の位置を探る手掛かりは少ないが、岬に近く東西に狭い地形から、移転したとしても近距離、しかも他地区より遅れた可能性がある。その根拠として、まず「古新潟之図」によれば、対岸に移転すべき中洲がまだない。また、移転したなら跡地は寄居村に提供されてもよい筈だが、「享保田畑図」は往生院⑭が北限である。そして、島村へ移転直後につくられた明暦地子帳に、須崎町は東側64軒、西側56軒と記録されている²⁴⁾。これは享保期の町割図に描かれ²⁵⁾、現在もその痕跡を留める古洲崎町とは姿異なっており、むしろ「古新潟之図」の須崎イッテツ町が両側町に発展した姿に近い。つまり、移転せず後世に街路、区画を変えただけかもしれない。

図5 「古新潟之図」に描かれた浜村新潟の比定位置
(新潟市地理情報システムより作成)

11. 結論

本研究では砂丘の形成や河道の変化に関する既往研究の成果から、17世紀前半における寄居地区の地形を復元し、さらに18世紀の「寄居村田畑図」を介在させることにより、「古新潟之図」が描く浜村新潟の位置比定が可能となった。結論は以下のように要約できる。

- (1) 「享保田畑図」に描かれた、寄居道の南に接するほぼ整形の区画は、「古新潟之図」における御上蔵、御下蔵に関わる水路の遺構と推定した。
- (2) 従って、島村新潟のヲクラ小路(北)は寄居村の寄居道、現在の営所通りに重なる。
- (3) 浜村新潟の北部は河口に近づくほど東西の幅が狭く、「古新潟之図」では広小路以北でそれが顕著である。「享保田畑図」では広小路道以北は先細りの砂畑であり、「現状図」でも広小路以北で微高地と

寺裏が接近する。従って、広小路は浜村新潟の時代から享保期を経て、現在に至るまで同じ位置にある。

(4) ヲクラ小路(北)と現営所通、旧広小路と現広小路の一致を手がかりに、「古新潟之図」を現在の地図に重ねることができる。^{注6)}ただし、浜村新潟の南西部分は新潟大学医学部などがある砂丘台地に埋もれている。

(5) 日和山から神明神社に至る微高地は、より古い時代に形成された新砂丘Ⅲ-1と推定され、室町期以降に拡大、東進した新砂丘Ⅲ-2から独立している。従って、浜村新潟の古い部分、すなわち古町は成長が止まった新砂丘Ⅲ-1、寺院列は未成熟だった新砂丘Ⅲ-2の上に形成された。

(6) 元和の町建ては、堆積が進んだ西川の旧河道で行われた。その低地は寄居村の中心的な耕地となり、近代には寺裏堀、西中堀、東畑堀などの水流が復活したあたりである。

本研究の成果として、第一に、砂丘地形の高低に沿った街区の構成、河川堆積の進行に合わせた町域の拡大など、自然環境の変化と都市空間の動的な整合性が確認され、「古新潟之図」への支持を強化できたと考える。第二に、常に変化する砂嘴や砂洲の性質から、位置や縮尺の特定が困難だった同図に対し、後世の絵図や現代の地図と重ねる手がかりを提供した。第三に「古新潟之図」が描く浜村新潟の規模に対し寄居地区の河岸低地が狭すぎるとの小川の指摘に反論し、さらなる研究や議論を可能とした。

永く飛砂被害に悩まされた寄居地区の場合、砂丘台地はもとより河岸低地でも、近世初期の地表面が地下深くにある可能性は高く、そうした事情から浜村新潟の遺構が発掘されていないのではないかと、本研究が契機となり、多くの議論を経てその位置が正確に比定され、埋蔵文化財包蔵地として周知されれば、試掘調査や建設工事に伴う発見が進むものと期待する。

謝辞

新潟市歴史博物館の伊東祐之氏、砂丘館の大倉宏氏には貴重なご教示を、法政大学デザイン工学部の陣内秀信教授には研究全般のご指導を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 新潟市役所：新潟市史上巻、新潟市役所、pp. 1-11、1934
- 2) 新潟市史編さん近世史部会編：新潟市史通史編 1—原始古代中世近世(上)、新潟市、pp. 218-222、1995
- 3) 新潟市史編さん近世史部会：新潟の移転について、市史にいがた、Vol. 6、pp. 4-20、1990. 3
- 4) 小川敏偉：新潟町の移転—『新潟市史』に対する反論一、郷土新潟、44号、pp. 59-70、2004. 3
- 5) 小村式：新潟町の成立についての試論—平成版『新潟市史』を中心に一、郷土新潟、46号、pp. 42-61、2006. 3
- 6) 谷直樹：近世堺の町割りとその系譜について、日本建築学会近畿支部研究報告集、29 計画系、pp. 833-836、1977
- 7) 宮本雅明：日本型港町の成立と交易、歴史学研究会編、港町の世界史、2 港町のトポグラフィ、青木書店、pp. 79-110、2006
- 8) 玉井哲雄：近世地方都市における町並の形成—越前三国湊の町屋と都市構造、建築史学、3号、pp. 60-92、1984
- 9) 宮本雅明：都市空間の近世史、中央公論美術出版、pp. 496-497、2005

- 10) 十和田朗ほか：堀直奇による新潟の都市計画に関する一考察、日本建築学会北陸支部研究報告集、No. 38、pp. 413-416、1995
- 11) 小林正久：堀直奇と新潟のまちづくり、日本土木史研究発表会論文集、第5回、pp. 99-109、1985
- 12) 貝塚爽平ほか：日本の平野と海岸、岩波書店、pp. 56-63、1986
- 13) 新潟新町材木町建設覚、新潟町会所文書、新潟市歴史博物館蔵、元和三年
- 14) 新潟寺社古来記写^{注7)}、新潟市一番堀通町・佐藤俊雄氏蔵、元禄十一年
- 15) 新潟県立図書館：越後佐渡デジタルライブラリー、新潟区全図、地図・絵図 No. 87 の 8, 11, 15
- 16) 新潟市史上巻、前掲書、I 第六図、慶応二年新潟分間絵図、p. 18
- 17) 新潟市歴史博物館：絵図が語るみなと新潟、干上がり地御裁許御裏絵図之写、元禄十二年四月二十六日、pp. 36-37、2008
- 18) 新潟市史上巻、前掲書、p. 31-32
- 19) 新潟市：新潟歴史叢書 5—新潟の堀と橋、新潟市、pp. 31-32、2001
- 20) 新潟古砂丘グループ：新潟平野をめぐる地形と地質 5—砂丘と平野、URBAN KUBOTA、No. 17、pp. 12-15、1979. 7
- 21) 茅原一也ほか：新潟平野の形成とその災害をめぐる、URBAN KUBOTA、No. 17、pp. 22-43、1979. 7
- 22) 新潟市史上巻、前掲書、p. 33、新潟市史通史編 1、前掲書、p. 235
- 23) 新潟市史上巻、前掲書、p. 39
- 24) 新潟町地子帳写、新潟市史編さん室蔵、明暦二年
- 25) 上野雄一：近世新潟湊の都市史的研究、日本建築学会大会学術講演梗概集、分冊 F、pp. 783-763、1986. 7

注

- 注 1) 小村は旧著で旧市史を支持、同図は「一顧の価値もない」としていた。(小村式、わが町の歴史—新潟、文一総合出版、1979、pp. 50-51)
- 注 2) 新潟市立歴史博物館が所蔵する原図は縦横が 300cm 前後あり、また下記図録の写真は縮小が過ぎてともに複写に適さない。この事情により同図と対照・確認のうえ新市史掲載図から本図を作成した。なお、同館における名称は「新潟古図」だが、新旧市史の表記や新潟町移転時期に関する論争はすべて「古新潟之図」としているため、本稿もそれに従う。(新潟市立歴史博物館、「絵図が語るみなと新潟」、p. 20、2008)
- 注 3) 新潟市役所が所蔵した原図は、2003 年開館の新潟市立歴史博物館に継承されておらず、旧市史脱稿直後の 1933 年か 1955 年の火災で焼失した可能性がある。複製もないため、旧市史掲載図から本図を作成した。
- 注 4) 水準点 No. 4424 (中央区白山浦) では、1899 年からの 30 年間に 100mm 以上、地下水汲み上げの影響が著しかったその後の 30 年間には 300mm 以上の沈下が観測された(参考文献 21、p. 28-29)。1600 年からの 300 年間、1960 年からの 50 年間に前者程度の沈下を想定すれば、1600~2010 年の総沈下は 1000+100+300+170=1570mm と推計される。例えば、新潟市西郊の的場遺跡は砂丘上の古代遺跡だが、千年間に 6m 近く沈下し、頂上のみが沖積面上に露出していた。(飯塚明、的場遺跡の概要と予測—低湿帯遺跡の一例として、市史にいがた 12 号、1993. 3、pp4-23、)
- 注 5) 近世の絵図(例えば、参考文献 11)には「スワ」と「イナリ」が隣接して描かれており、明治末に合祀されて現在に至る。従って、正確には「享保田畑図」の記載が諏訪、稲荷どちらの社かは不明である。
- 注 6) 「古新潟之図」は空間構成を示す概念図に近く、補正なく精度の高い現代の地図と重ねるのは不適切である。従って、本図は個別の街路や施設的位置よりも、浜村新潟全体の位置を示すものとして参照されたい。
- 注 7) 小村式の前掲書(注 1 参照)における史料批判にもとづいて一部修正した。

(2011年6月27日原稿受理、2011年11月7日採用決定)